

風の末裔シリーズ・5th シーズンの3
～六連星・Ⅲ（むつらほし）～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

くカペラく

——ヒコ——イ・・——

三峰の山にヤンの指笛が響き渡る。

「あっちだ!!」

石弓を持った男達が、合図で知らされた方向へ走る。遅いへ発達した体躯を持つ三峰の民は、下生え敵しい山中の急斜面も物ともしない。

獲物を素早く谷に追い詰めて仕留めるのが、いつもの定石(セオリ)だ。でも、最近はこちらと違う。

——ビュン!!——

頭上高く、木の梢をしながら、何かが飛ぶように移動する。

影だけが地上を走って行く。

「よし、いいぞ! フウヤ! 追い越せ!!」

谷を渡って、反対の山へ逃げようとする牡鹿の目前に、白い影が飛び降りた。

鹿はUターンはしない。大概、利き足側に直角に曲がる。曲がった瞬間、待ち構えていたイフルートの弓が、鹿の急所を撃ち抜いた。

「凄い、またイフルートが一番矢だ!」

頬を上気させたフウヤが、鷺羽の男に駆け寄った。

「フウヤ、まず、祈りだ」

「あ、はこ」

男達は武器を降りし、絶命した鹿の前で、言詞(の)を唱えて黙とうを捧げた。

三峰の者達は、獲物を部落へ運ぶ間、決して談笑したり自慢したりしない。山から授かった命への礼儀だという。

「フウヤ、よくやったな」

石尾根で合流したヤンが声を掛けた。

チビッコで細っこいフウヤが、狩猟の役に立つとは誰も期待していなかった。事実、山を走ると下生えに埋もれて、あつという間に置いて行かれた。

「僕、高い所の木の枝を渡る方が得意なんだけどなあ」

「は、まさか…」

しかし、背の高い木の枝にぶら下がって、反動を付けて飛び渡って行くと、本当に早かった。谷へ落ちこちて行く形になるのに、フウヤは怖がらず、獲物に向かって一直線に、樹上を飛んで行けるのだ。

頭上から獲物を追い抜いて逃げ道を塞ぐのが、フウヤの役割になった。そして、狩りの成功率がグンと上がった。

「今日は終いだ。早く帰れる。皆、家族とゆっくり過(こ)そう」

イフルートが宣言して、男達は穏やかな顔になった。狩りの成功率が上がったからって、三峰の民は獲物を糸分に捕ったりはしない。出来た余裕は、養蚕など、別の事に使えばいい。

部落へ戻り、獲物が分配されて、やっと自由に喋れるようになった。

「ね、ヤン！ イフルートの弓ったら、狙った所に吸い込まれるみたいに飛んで行くんだよ。走るのもすごい早い。今日なんか、こおんな崖を飛び降りたんだ!!」

フウヤはすっかりイフルートファンになっている。まあ、部落の子供達も多分に漏れず、鷲羽のイフルートに憧れている。強いし、頼もしいし、何にでも精通している。

「はいはい、そつだな。それよりフウヤ、午後の時間や」
「ヤンは、煮られた鹿の内蔵の碗を差し出しながら聞いた。

「勿論……!」
フウヤはそれを素早くかき込んだ。最初は苦手だったが、すっかり慣れたようだ。

「馬の練習をしよう。僕、今日は東尾根を止まらず駆けられるようになるよ!」

連れ立って厩へ走る少年二人を、イフルートと側近の何人が眺めていた。

「相変わらずだな、あの二人。まだ飛ぶつもりなのかな？」
「さあ、飛べる飛べないは別にして、騎馬を上達するのは悪い事ではない」

「山の生活に乗馬は必要ないだろう?」
「山で一生過す訳でもあるまい」
「イフルート?!」

イフルートは尾根を駆けて行く二頭の騎馬を見やった。
「あの二人はこの山に納まらない。そんな気がする」

「この部落に若い者は大切だって言ったのはお前だろう?」
「勿論、見聞を広めた後には戻って来て欲しいさ」

「甘いな」
「そうか?。俺はちゃんと戻ったろ?」
「……………」

鷲羽のイフルートは若い頃から放浪癖があった。

部落を留守にしては、様々な知識を持って帰って来た。そして、災厄が去った直後、それまでのツテを要(かなめに、羽根の秘密を調べあげたのだ。

「皆を惑わせてしまったがな」

「そつでもない、お前がケシメを付けてくれねば、俺達はいつまでも羽根を求めて混乱していた」

「…そう言ってくれると、助かる」

イフルートの放浪癖は、今はすっかり影を潜めていた。どんな所においても、故郷がある安らぎが自分を支えてくれているのだと気付いた時、彼は剣を手に持ち代えて狩猟の民に戻った。

だから、若者はほとんどん旅に出るべきだと思っているし、ちゃんと戻って来ると信じている。

「俺みたいに頭でっかちにならないで、遠くを見渡せる者になって欲しいな、あの二人には」

夕暮れ、二頭の騎馬が長い影を落として帰って来た。

「フウヤはやら二〇二〇している。」

「馬の世話は僕がやっとくから、早く届けて来な」

「うん、ヤン、ありがとー!」

白い少年は泥の付いた布包みを大切に抱いて、部落の奥へ走って行った。

家々には明かりが灯り、あちこちで機織りの音がする。狩猟の部落であると同時に、養蚕の部落でもあるのだ。

「あ……」

足元に糸の玉が転がってきた。部落に飼われるヤクの毛を紡いだ糸。

「……また……」

玉から伸びる糸を辿って、柔らかな灯りの漏れる窓辺に行き着いた。

「こんにちは」

糸玉を持って、そおっと窓から覗く。

「あっ!!」

窓辺にはベッドがあり、いつも長い三つ編みの女性が静かに佇んでいるのだが、今日はその女性は身体を二つ折りにして、苦しそうに荒い息をしているのだ。

「おばさん、どうしたの、大丈夫?! おーい、誰かいませんか」

「フウヤは家の中に声を掛けた。しかし家人は不在なようだ。」

「もうー!」

「フウヤは窓を乗り越えた。」

「どこが痛いのか? 苦しいのか?」

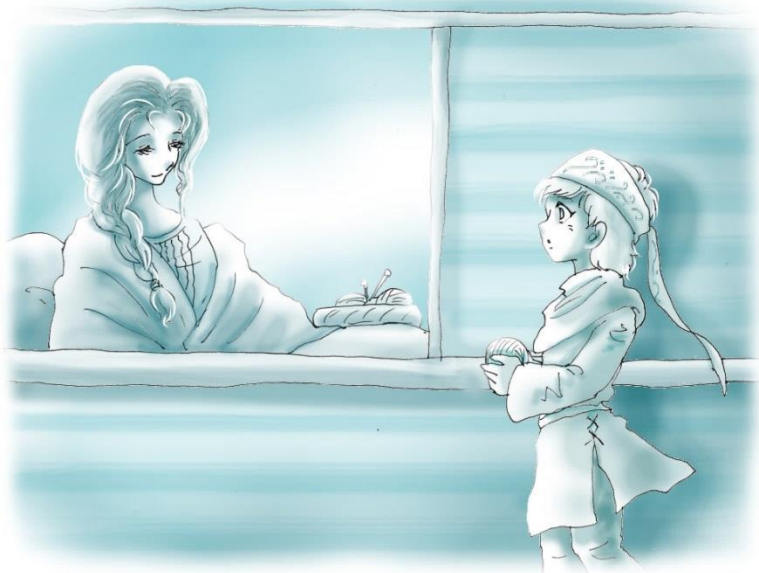
背中をさすって声を掛けると、女性の息は穏やかになった。

「さすったら楽になる?」

女性が小刻みに頷いたので、フウヤはひたすらさすり続けた。かなりの時間が過ぎ、女性の様子が落ち着いて一安心した時、大きな声が出た。

「お前、ここで何をしている?!」

部屋の入り口に男性が立っていた。狩りの時見る顔だが、あまり話をした事がない。



「あの…、苦しそだったから…」

フウヤはちょっとビクついて答えた。

このヒトの家だったのか。いつもムスツとしていて、苦手に思っていた。胸の刺青も、何だか怖かったのだ。

「苦しそっ。」

男性はベッドに横たわる女性に近付いた。

「また、胸か？ 大丈夫か？」

「ええ…。」

女性は目を閉じたまま、細い声で答えた。

「もう治まったわ。カペラがずっと背中をさすってくれたの。

優しい子…」

「…………。」

黙って唇を結ぶフウヤの肩に、刺青の男性が手を添えた。

「ああ、優しい子だな。まったく、まだ無理をして編み物などしているから」

「だって、カペラのセーターが小さくなったから、ほどいて編み直そうと思ってる」

「そっだな、子供はすぐ大きくなる…。さあ、少し寝なさい、おやすみ」

「おやすみなさい、あなた…、おやすみ、カペラ…」

フウヤは男性に肩を押さえられて、部屋を出た。

「あの…」

「ああ、あいつの世話を焼いてくれていたんだな。怒鳴ったりして悪かった」

「僕、カペラじゃない」

「分かっている…」

男性は戸棚から干した果物を取り出した。

「ヤンと食べ」

「ありがと…。ね、おばさん、病気の？」

「お前は気に掛けなくともよろ」

「……………」

「あいつに会うのは今日が初めてではないのか？」

「うん…。部落へ来た次の日」。窓から転がった糸玉を拾って

あげたの」

「……………」。「……そうか…。最近はこの子供も見ない振りしていたからな。

お前もいちいち相手にしなくていいんだぞ」

「……………」

フウヤは黙って懐から泥の付いた包みを差し出した。

「何だ？」

「参(しん)。ヤンが教えてくれた」

包みの中は、太く曲がりくねった植物の根だった。

「滋養(じい)いい薬(な)なん(な)で(で)し(し)ょ(ょ)。ま(ま)っ(ま)き(き)山(やま)で(で)見(み)付(つ)けた(た)の(の)。お(お)ば(ば)み(み)

んにあげようと思って」

「……ああ……」

確かに参は、滅多に見つからない貴重な薬根だ。

「有り難いが…。しかし、ヤンの家でも欲しがるのではないか？」

「山の恵みは一番必要な者の所に…。って、教わった」

フウヤは参をテーブルの上に置いた。

男性はそれを少しの時間眺めたが、やがて棚を開けて、小さな鞘付きナイフを取り出した。

「お前の手に丁度いいだろう。やる」

「……………」

「どうした、受け取れ」

「カペラの、なの？」

「まだ、あいつのではなかった。誕生日にやろうと、準備して

いた物だ」

「……受け取れな」

「物は、使ってくれるヒトの元にあるべきだ、そうだろう？」

「……………」

フウヤは両手を出して、小さなナイフを受け取った。鞘と柄は武骨な手造りで、男性の刺青と同じ模様が彫られていた。

「ありがと……」

「こ(こ)っ(こ)ち(ち)も(も)、参(ま)を(を)、有(あ)り(あ)難(が)う(う)な(な)」

「あの」

「ん？」

「僕、またおばさんを訪ねてもいい？」

「同情はあまりよくないんだ。ああいう心の病には」

「そう……でも……」

「フウヤは目を伏せて、小さな声で言った。

「僕……お母さん、二人いるの。僕を生んでくれたお母さん、育ててくれたお母さん。でも二人とも、僕を必要としてくれなかつた」

「……」

「だから、僕を必要としてくれる『お母さん』がいるとしたら、

僕は……えっと、凄く嬉しく」

「……」

「ね、来てもいい？ おばさん、疲れさせないように気を付けるから」

「……」

「……」

「駄田」

「いや……いい……いい……構わない」

「戸口で別れる刺青の男性に、フウヤは果物とナイフを胸に抱いてお辞儀をした。地味で武骨なその男性の刺青は怖くなくなっていた。

刺青の男は黙って見えなくなるまで白い子供を見送った。

青い空に二つの影が現れ、ゆっくり騎馬の姿になって、三峰部落の広場に着地した。毎年、蒼の里への行き帰りに立ち寄る、西風の里の二人の青年。

「シド！ ソラ！」

「ヤンが真っ先に駆け寄った。

「よっ、ヤン！」

「またお世話になるぞ」

「ね、僕、ついに馬を手に入れたの。早く見て欲しくて」

「そうか、やったな！ 後で厩に行くよ。まず族長殿に挨拶しなかつちゃ」

「ヤンが彼らの馬を受け取って既に引いて行くと、物陰からフウヤがそっと覗いた。

「どうした？ 馬が空を飛びのを見るの、初めてか？」

「うん……」

「フウヤはおどおど出て来た。

「あの二人？」

「西風の里のシドとソラ。毎年蒼の里の行き帰りに寄って行くんだ。な、この機会に、目一杯乗馬を教わろうよ。シドの飛行術は、蒼の長殿も一目置くほどなんだよ」

「う…うん…。ね、ヤン、頼みがあるんだけど…」

「ん？」

「よっ、お待たせ！」

シドが急に顔を出して、フウヤは飛び上がった。

「ん？ 新顔だな、友達？」

「うん、僕んちで一緒に暮らしている、フウ…」

「カペラって言います!!」

ヤンがしゃっくりしたみたいに黙った。

「い、いい名前でしょ!。僕、気に入ってた。ね、ヤン」

「あ、ああ…。カ・ペ・ラ…」

ヤンは呆気にとられながら、話を合わせてくれた。

「ぶうん、カペラ、宜しくね。お、ヤンの馬はごっちゃん。両方

ともいい馬だ」

シドが馬のトモを後ろから眺めている隙に、フウヤは素早く耳打ちした。

「あの市場のヒト買いのヒト、蒼の里に知り合いがいるの。僕、

万が一にもここに居るのを知られたくな」

「そっかー」

ヤンは素直に納得した。

「よし、待ってろ、村中に示し合わせて来」

律儀な少年はワインクして駆け去った。

「ごめん…ヤン……」

ナーガ義兄様に、自分の居場所を把握されたくない。自分で築いたこの世界は、僕だけのモンだ!

「ヤン、今回の旅は急ぎなんだ。すまない!!」

シドは手を合わせて謝った。明日の朝早く出立するので、乗馬を教える暇はないという。

「え？ フウ…カペラも楽しみにしていたのに」

「次はゆっくり来るから」

常宿にしているイフルート宅へ行くと、ソラとイフルートが大量の書物に埋もれて何やら話していた。うんちくと雑字オタクの二人は、非常に話が合うらしい。

「えと、カペラ…、僕はソラ、初めまして」

イフルートはソラの後ろでフウヤを見て、そっと頷いた。このヒトまで偽りに巻き込んで、申し訳ないと思った。

「カペラっていうと、冬の夜空のダイヤモンドの一角だね。黄色い星の中で一番明るい。両親は星が好きなのかな？」

「え……………」

「ほら、君の胸のナイフ。その鞘にも冬のダイヤモンドが描かれてるよ」

「あ…そう、そうなの…」

フウヤはしどもどして俯うつむいた。ソラはちょっと眉を動かしたが、それ以上は突っ込まなかった。

「所で、いつもと時期が違うな。西風の夏の祭祀はもうちょっと後じゃなかったか？」

毎年、春から秋に蒼の里に滞在する二人だったが、西風の里の大切な祭祀の時には、暇を貰って一時帰省していた。

「ええ、今回は急用なんです」

大人が話をし出したので、少年二人は会釈して立ち去ろうとした。

「祭祀前に、長娘のルウシエル様の婚儀があるんですよ」

ヤンは入り口でつまづいて転び、フウヤは柱にぶつかかった。

「婚儀？ ほお、あの勇ましい娘の。しかし、何年前にもそんな話があって、流れたんじゃないか？」

「ああ、今回は本決まりです」

「相手はどんな奴なんです？！」

「相手はどんなヒトなの？！」

額と顎を擦りむいた少年二人は、同時に叫んでいた。

く西へく

夜更けの寝静まった三峰の部落。

そっと抜け出す二騎の影があった。

岩尾根に辿り着いて、二人はやっと声を出した。

「いいのか、フウヤ。無駄足かもしれないぞ」

「ヤンこそ、イフルートに大目玉だよ」

二人はこれから全力で西風の里へ向かう。空を飛べるシド達が数日かかる道程を、一体何日かかるか分からない。でも、じっとなんか、していられなかった。

風間、一旦イフルート宅を追い出された二人が、裏壁にピツタリ耳を寄せて盗み聞いた話はこうだ。

ルウのお母さん、西風の里の長のモエギってヒトが、身体を悪くして倒れた。シドが言うには、里の陰険な老人達が苛め過ぎたからだって。お父さんの所にいたルウは、慌ててお母さんの側に駆け付けた。

それで、何でそういう事になるのか、少年二人にはまったく理解出来ないけれど、『お母さんの負担をなくす』為に、ルウは好きでもないヒトと、結婚するらしい。しかも、相手の男のヒトも、ルウの事好きじゃない…ところか、シドに言わせたら、クソボンクラのヒーロークダマだって。

「全っ然、わかんない！ 三峰じゃ有り得ない。どっちも好いていない同士の結婚なんて！」

「風露でだって無いよ」

二人はサクサク山を降りて平地に掛かった。西の砂漠への道筋は、シドに聞いた事があるから、だいたい分かる。

ヤンはイフルートの家から無断で借りて来た地図を広げた。

彼と仲のいいソラが、地図に西風の里の場所を記している。

「あっちだ。夜の内に出来るだけ進もう。夜進んで昼間休めば、シド達に見付からない」

「うん」

フウヤは、最後にイフルートがシドに聞いた事を、思い出していた。

「蒼の里の長殿はどう考えておられるの？ ルウシエルとも懇意なのだろう？」

そつ、義兄様が許して置く筈がない！ フウヤは耳が潰れる程に、壁に押し付けた。

「蒼の一族は、前の長の代から、西風の中で決まった事には口出ししない方針なんだ。それに、婚儀を知らせて来た手紙の中に、ナーカ様宛にルウ様から直筆で一筆あったんだ。心配も手出しも無用だよ」

「そんなの…、強がりじゃ決まってるじゃないか！」

そのまま受け取ってのほほんとしているなんて。義兄様なんて…、大人なんて、宛にならない！

「しかし、フウヤもルウを知っていたなんて、驚きだな」

憤りに拳を握っていたフウヤは、ヤンの言葉で我に返った。

「あ、うん、そうだね。僕もビックリだよ」

「僕な、ルウには本当に感謝してる。ルウがいなければ、大きな罪を犯して、ずっと眠れない夜を過ごす羽目になっていた。

それに、大事な事を教わった。大切な者を護る為に、今出来る全力を尽くすって事」

ヤンは遠い目をして言った。

「僕…、僕は、そんな大層な思い出はない」

フウヤもポツポツと話した。

「ただ、小さい頃、ちょっと遊んだだけ。でもね、分かる。ルウが大切な者を全力で護るって。友達が崖から落ちて、助けるために一人で崖を降りたんだ」

「うん、ルウらしいな」

「それで大勢の大人が搜索して、見付からなくて、皆諦めムードで真っ暗になってた所に、その子を背負って現れたの。しゃほくれてんなあ！ って」

「カッコイイ！ 無茶苦茶ルウらしいな！」

「うん、僕の中で、その時からルウはヒーローなの。強くて、カッコよくて、何が来ても負けない。だから…そのルウが、そんな酷い目に遭っているなんて、許せない」

「ルウは優しいから、きつとまたお母さんとか、誰かを護ろうとしてるんだよ」

「今度は僕が」

「僕らが」

「ルウを護りに」

「うん、行くんだ」

「僕達が余計な話をしてしまったからでしょうか？」

もぬけの殻の厩と行き先を告げない置き手紙を前に、シドとソラは申し訳なさそうにイフルートに言った。

「構わない、若い内はブラブラするもんだ」

「それはお前だけじゃー」

頑固医師が息子の耳を引っ張った。

「まあ、今から地上を行ったとて、婚礼の儀とやらには到底間に合わぬわ。それが分かかっていて行く馬鹿者どもの心配などせずともよいわい」

「親父、そんな、ミモフタもない」

「何も出来ない者が出来ないなりに歩き出してる。歩き出さぬ

と可能性はゼロじゃが、歩き出すとゼロではなくなる。ゼロとゼロでない事の違いの大きさが分かるかいのう？」

「……………」

地平線に金の線が入り、朝陽が登る。朝焼けの中トボトボ歩く二人は、さすがに疲れて来た。

「ねえ、ぼちぼち休もうよ」

「そうだな、馬にも飼いをやらなきゃ」

手頃な森の繁みを見付けて、上空から見えないよう、馬を隠して麦と水を与えた。

「あっ」

上空を二頭の騎馬が過る。シドの青毛とソラのパロミノだ。二人には気付かず、一直線で西風の里へ向かって行った。

「見付からなかったね」

フウヤはホッとしてヤンを見たが、隣のヤンはまだ空を凝視したままだ。

「ヤンっ」

「何だ、あれは…?!」

「ぶっしたのっ」

フウヤが目を凝らしても見えないモノが、ヤンには見えていゑらしい。

「危ない!!」

ヤンは馬に飛び乗って急発進させた。

「ヤン?!」

「シドー! ソラー! 後ろ——!!」

必死で叫びながら走るヤンの後ろを、フウヤも慌てて着いて行く。

「一体、なに?」

もう一度空を見上げて、今度は気付いた。空の二騎の後ろの、妙に灰色な雲が、不自然に渦巻いているのだ。

「シド——!!」

しかし、空の二騎はヤンの声に気付かず、速度を上げて飛び去った。雲の揺らぎは、追い付けないと思っただろうか? その場に停止した。

「大丈夫だったんじゃない?」

「ああ、そうだな」

「あっ?」

フウヤが指差す灰色の雲が、どんどん下降して向かって来る。狙いをこちらに定めたのだ。

「何か分かんないけど、逃げろ!!」

二人は逃げようとしたが、馬だって疲れている。あつと言っ

間に、大きな灰色の渦に追い付かれ、飲み込まれてしまった。

「フウヤ!!」

「ヤン——!!」

二人は馬から投げ出されて、バラバラに飛ばされた。

もがくヤンの向かい合わせに、すうっと何かが流れて来た。

フウヤじゃない! 黒い瞳の、自分と同じ顔?!

へい! お人好しの偽善者。無駄無駄、今から西へ向かったって間に合いっこない。取りあえず行ってみるって、自己満足だけじゃん。結局は誰の役にも立てないんだ。いつもそうだな、お前はく

「な、なんだ?!」

フウヤの耳元にも、背後から白い少年が摺り寄って来た。

へ僕はチップケで弱い…。弱いんだ、どうしようもないくらい。どんなに突っ張ったって、これ以上の者にはなれない。生まれ持ったの限界があるんだよ。いいじゃん、守られるだけの者でいねば。もっと甘えて、楽チンしようよく

「えっ、何? 何?」

「破邪——!!」

誰かの叫び声と共に眩い閃光が走り、マボロン達は目を覆っ

てうずくまった。

「その二人！ こっちに向かって走って!!」

「む、無理ィ…」

「足が、地に付かないよ」

「それでも走れ！ こっちも、もうもたないぞ!!」

「まま待って…」

「ちくしょー!!」

必死でもがいて、二人は草原の土の上に投げ出された。

「いったあーい」

「フウヤー!」

頭がジンジン痺れて、すぐには動けない。何だったんだろう、今の？ ホンの一時だったけれど、凄く嫌な気持ちになった。

「大丈夫か？ 頭、しっかりしてるか？」

声のする方に顔を向けると、一人の少年が、草の馬から下馬して駆け寄って来る所だった。ヤンよりちょっと年下位の、コバルトブルーの短髪の少年。

「えと…助けてくれたんだよな」

ヤンは何とか身体を起こした。

「有り難う、恩に着るよ」

「口に砂利が入っちゃった…」

フウヤも、擦りむいた膝を気にしながら起き上がった。

「ありがと…、あ、…蒼の妖精のヒト？」

「うん。俺は、蒼の一族のユウジーン」

「じゃあ、僕は、カペラ…」

ヤンが呆れた苦笑いで肩を竦めた。

「僕はヤン。なあ、何なの？ 今の」

「ごめん、説明してあげたいけれど、急いでいるんだ
ユウジーンは慌てた感じで空を見た。

「ああ、行っちゃったか…」

「??」

「あの、もしかして、さっき上空を通過した二人？」

「? うん」

「シドとソラ？」

「知ってるの?！」

「ああ、で、何であの二人を追っているの？」

「西風の里へ行きたいんだけど、場所を知らないんだ、俺…」

「西風の里へ？」

「うん…」

「だからって、何で尾行するよんなマネを？」

「西風と蒼の一族は、仲がいいんだろ？」

「………」

「ここでフウヤが口を挟んだ。

「ねえ、貴方…、もしかしたら、蒼の里を勝手に抜け出して、私情で西風を目指しているんじゃないの?」

「!!」

「フ…カペラ?」

「僕達、西風の里の場所、分かるよ」

「ホント?」

「話の内容によっては協力するよ。助けて貰った恩があるし」

「ユウジーンは素直に話し出した。

「…幼馴染みが…」

「うん」

「幼馴染みの女の子が、政略結婚で、ヒョーロクタマな奴といっしょにさせられそうなんだ。俺、絶対、助けてい!!」

「フウヤは小さい声で呟いた。

「ブン!…」

怯えていた二人の馬が、やっと戻って近寄って来た。

「僕達の馬は普通の馬なの。三人一緒に移動するのは無理だね」

「ヤンとフウヤも目的が一緒なのにユウジーンはびっくりしたけれど、ともかく三人は輪になって相談を始めた。

「やっぱり、僕達の地図をユウジーンに渡して、先に行って貰っ

のが一番だよ」

「うん、だけれど、ユウジーン、貴方、西風に到着してどうするの? 何か考えてる?」

「フウヤが真面目な顔でユウジーンを覗き込んだ。

「婚礼を阻止出来るプラン」

「プランって……なきゃ駄目か? 俺はルウに会って誠心誠意

説得しよう」と…」

「ぜんぜん! お話にならないよ!!」

「フウヤが肩をそびやかして口を尖らせた。

「そんなんでカタが付く位なら、ルウが自力で何とかしてる。

そうは行かないガンジガラメの状態なんだよ!」

「じゃあ、暴れて儀式の邪魔をすとか。僕、家畜を暴走させる指笛を教えてやる」

「ヤンが横から言った。

「だからあ!」

「フウヤは白い猫毛をワサワサさせて頭を振った。

「式なんか幾らでもやり直せるだろ。そんなんじゃ根本的な解決にはならない」

「……………」

「ヤンもユウジーンも自分達の考え足らずを反省し、一番年下のフウヤの、自信たっぷりの顔をマジマジと見た。

「ルウも、周りも、納得させて、婚礼を阻止する方法が一つ有るよ」

「おっ、ホントか?」

「その方法とは?」

「自らルウにプロポーズして、相手の男に決闘を申し込むんだ」

「えええええ——?!!」

「だ、だって、政略結婚だろ? 花婿になるには高いハードルがあるんじゃないのか?」

「ユウジーンのもっともな問いに、ヤンも頷いた。

「僕ら、時間の一杯ある子供だよ。これから、何でも幾らでも築ける。何を言っても嘘にはならないさ」

「……………」

サフリと言ってるのけるフウヤに、二人は絶句した。この子は知恵長けているのか、世間知らずなのか……多分両方だ。でも妙に納得してしまう…。

嘩然としている二人を尻目にフウヤはサクサクと話を進めた。

「あの誇りが服を来て歩いてるヒトに、フェイクのプロポーズなんて通用しない。目一杯マジに、プロポーズするんだ。ユウジーン、出来る?」

「ユウジーンは額を真っ青にして唾を呑み込んだ。

確かにプロポーズしておいて、『あれは、式を阻止する為の出まかせでした』なんて言おうモンなら、久し振りの跳び回し蹴りを浴びる事になるだろう。

「…やる! ルウが不幸でなくなるんなら、何だってやる!」

悲愴な顔だ。ルウシエルはまごう事なく素敵な娘なのだが、お嫁さんにするっていうと…ちょっと…その…心の準備が…。

「ちよっと待ったあ!」

ヤンが自分の膝を見つめながら瞬きもしないで叫んだ。

「それ、ユウジーンでないと駄目か?」

「ヤン、草の馬で飛べるのはユウジーンだけだよ」

「……………」

「ユウジーンも、複雑だった。

三人ともルウを助けたい気持ちは一緒。行けるモノなら一緒に行きたい。しかし、草の馬一頭で三人はさすがに無理だ。自分にもっと風を起こす力があたらいいのに…。

そう思って眺めていた地面が、不意に薄暗くなった。

「?!」

目を上げると、上空に灰色の雲が渦巻いている。

「また現れた!」

「そっだ! 一度現れた場所には頻発するんだっだ」

剣を抜いて破邪の呪文を唱えようとしたユウジーンが、ハタと止まった。

「ユウジーン?」

「ヤン、カペラ、君達が西風の里に辿り着ける方法があった!」
「えっ?!」

「あの渦は空間も歪めている。西風の方を向いて馬で飛び込んで疾駆すれば、かなりの距離を縮められる筈」

「ホントか?」

「ただしあの空間には、さっきの『魔』が巣食っている。入ったら確実に襲ってくる。その危険が…」

ユウジーンが言っている間に、二人は馬を引き寄せて乗馬していた。

「さあ来い、渦巻きちゃん!」

「出来るだけ西風の近くまで運んでくれよ!」

二人の声に呼応するように、渦巻きは下降して来た。

「最後まで聞けよ!」

「危険って、さっきの真似ッ!妖怪が来て、ちょこちょこ言っ奴だろ?。気分悪いけれど、噛み付く訳じゃない!」

「あんなモン、ルウを怒らせた時のおっかなさに比べたら、ヘンがお茶を沸かしちゃうしベルだよ!」

「お前ら…」

ユウジーンは刀を鞘に収め、自分も馬に飛び乗った。

「行くぞ! 固まって、はぐれないようにな!」

「えっ? ユウジーンは危険を言さなくても、飛んでけるでしょ?」

「ヒトに危険な道を教えといて、自分だけ安全に行ける訳ないだろ!」

「付き合いいいじゃん、兄弟!」

「いつの間にかこんな生意気な弟が出来たんだ? …来るぞ!!」

目の前に渦巻きが広がり、三人は正確に西へ向けてジャンプした。

向かい風みたいに灰色の渦がぶつかって来る。ぬるぬるが凄く早くて腕や首の表面を流れて、めっちゃ気持ち悪い。

三頭はユウジーンを先頭に三角形に固まって駆けていた。

フウヤの横にスウツと白い少年が摺り寄った。

〈強がってないで…楽チンしようよ…〉

ヤンの目の前にもマボロシが飛んで来た。

〈損はつまんないよ…得する事だけやって行こうよ〉

二人は、意地悪なささやきを頭に入れないよう、一生懸命、他の事で頭を埋めようとした。前を駆けるユウジーンの草の馬!、そう、いつか飛ぶんだ、こんな風に飛ぶんだ!

ユウジーンは手こずっていた。

「バルトブルーのマボロシは、舌なめずりして嘔き掛けて来た。初めて出会った奴にまで気を使って、苦労して、面倒なだけじゃないか。出会わなければ一人で飛んで行けたのに。この二人、お前に何を返してくれるっていうんだ？」

「俺は…、見返りを求めて、ヒトと接している訳じゃない」
「俺は…、見返りを求めて、ヒトと接している訳じゃない」
「俺は…、見返りを求めて、ヒトと接している訳じゃない」

「ケレイ事だね。じゃあ、最初からヒトに関わらなきゃ楽だぜ。そうしようよ、な！」

「俺は……」

「ユウジーン!!」

「ユウジーン……!」

ぼやけて来た頭に、後ろの二人の声が響いた。さっき出会ったばかりの二人の、自分を心底心配してくれている声。ユウジーンは心と呼び戻してマボロシを睨んだ。

「お前にだって分かっているんだろ？ 出逢いを生かすも殺すも自分次第って事。一個一個の出逢いを大切にすることが、俺の形を作るんだ!」

ぬるぬるの空気を切り裂くようにヤンが叫んだ。

「黄色い砂の原だ!」

彼の目は灰色の空間を通して、向こうの景色を見ていた。

「しっかり付いて来て!」

ユウジーンは鞍上で剣を抜き、呪文を唱えて空中を斬った。目の前に出来た裂け目に、三人は順番に飛び込んだ。

〜誓い〜

「母者……」

西風の里の中心、古い宿屋の寝室の御簾を、ルウシエルはそっと上げた。ここを取り壊さずに、モエギを療養させる自宅にするのを、老人達は勿体ぶって許してくれた。

モエギはベッドに横たわったまま、深い眠りの中にいる。

「は・は・じゃ……」

ルウシエルは込み上げるモノをぐっと呑み込んで、熱の下がない母の額の手拭いに手を添えた。

「…一人きりにして…ごめん…」

何週間か前、いつものように朝の風を流しに上空へ飛んだモエギが、夜になっても戻らなかった。

翌日、ルウの暮らす砂の民の総領宅へ、西風からの使者が来た。砂の民の部落でも預かり知らぬ事と分かり、双方でヒトを

出して捜索しようとしていた所に、馬だけ戻って来た。

馬の案内で、西風の里近辺の灌木の中に、倒れたモエギが発見された。高熱でもううつとして、意識が戻らない。

「娘御が放蕩しているの、心労が溜まってしまわれたのじゃ」
老人達に責められるまでもなく、ルウシエルは母の枕元にひざまずいて詫言した。

「ごめん…、母者の強さに寄り掛かり過ぎた」

そして、自ら砂の民の総領と父の所へ出向いて、西風に戻り、母を助ける為、長の血を継承して行くこと告げた。

「ごめん…爺さん、父者(てて)じゃ…。せっかく迎えてくれたのに、私、皆の為に何も出来なかった…」

総領は何も言わずに孫娘を送り出し、項垂れて去る娘を父が追いつけた。

「お前は自分の為に何か出来たか？」

「……分らない…」

「その為にお前はここに居ただけだ」

「父者…」

「自分を大切にしてくれる者であってくれ」

「父者、一個だけ、お願いがある」

「ああ」

「私が西風を継いで、子供を生んで、風が滞りなく流れるよう

になったら、母者を迎えに来てくれ」

「……………」

「母者は、本当は寂しがりで弱い」

「知っている、昔から…」

熱に浮かされたモエギが、意思が有るか無いかのあやふやな感じで、右手を空へ向けてふわふわ回した。昔、同じ場所でカワセミがやっていたように。これで砂漠の上空の風が流れる。こんな状態でも、自分の役割を全まっとうする母を見て、ルウは決心を新たにした。一日も早く、肩の荷を降ろさせて、父の元へ行かせてあげたい。

老人達だって闇雲に無茶ばかり言っている訳じゃない。

西風の長の役割…、砂漠の風を流す事は、本当に大切なのだ。

風が滞ると、気が殺み、悪い事ばかり起る。

血の薄い自分に、風を流す能力が芽生えるかは怪しい。だけれど、血統確かな者との間の子供なら、多分その能力を持って生まれて来る。

皆の役に立つ事なら、自分はきっとその中で幸せになれる…。寢室を出て、廊下を挟んで向かいの二間をぶち抜いた広間に入る。正面に金糸銀糸の婚礼衣装が掛けられ、その前で、ついさっき到着したシドとソラが振り向いた。

「母者は今なら具合が落ち着いているから会える。だけれど、会話は出来ないとい心得て置いてくれ」

「はい…」

「ルウ様…」

「豪華だろ。老人達、張り込んだもんだ。こっちは重くて大変だっただ」

「ルウ様……」

「そんな声出すな。相手がハゲじゃなかっただけ儲けモンだ。

こないだちゃんと会ったぞ。名前は…、えっと、なんだっけ…、まあ、ふくよかで、いい奴そうだった」

「……………」

「早く母者に会いに行つてやってくれ。母者は二人が大好きなんだ」

シドとソラが眠っているモエギに挨拶して廊下に出ると、ルウは黙って窓から空を眺めていた。

声を掛けずに外へ出た二人も、空を見上げた。青空に、羽毛のような綺麗な筋雲が流れて行った。

「そこを通してくれ！」

正面に元老院の老人達が数人、徒党を組んで立ちはだかつていた。

「嬢様と明日の打ち合わせがあるのじゃ」

老人達は、父親が付けたルウシエルの名前をけて口にしない。二人が片側に避けて道を空けると、老人達は一寸すら寄りなないで横並びのまま、そこをノシ歩いた。すれ違いざま、

「厩番ふぜいが……」

と、腹話術のように口の中で言うのが聞こえた。

「……………」

二人は、黙ってそこを去った。慣れっこだし…。

自分達が厩で育った事を恥じた事はない。里の皆の命を預かる馬の管理を、幼い頃からやって来た事を誇りに思っているし、モエギ様はいつだって、そう言つて二人を大事にしてくれた。

ただ、故郷の西風の里に帰る度に鬱々たる気分させられるのは、やりきれなかった。

「先生!!」

修練所の坂道を何人かの子供が駆けて来た。

シドとソラは冬の間、子供達に勉強を教えているのだ。

「おかえりなさいー」

「ああ、皆、元気だったか?」

「うん! ね、ルウシエル様、やっぱり同じ年で一番だったね」

ルウより三つ四つ年下の女の子が言った。

「…ああ、そうだね…」

「私も早くケツコンして、コドモ生むんだ。私は純血だから、一杯コドモ生みなさいって、長老様が」

「……………」

十年前に蒼の長様がいた頃は、こんな事を言う子供はいなかった。またその里は、老人の支配でおかしな空気になっていた。

「チッケッタ!」

西風の里近くの砂漠の真ん中。

輪になってジャンケンしている三人組がいた。ヤンとフウヤとコウジーンだ。

「ああ! またアイ」だ」

「おい、そもそも、勝った者が行くのか? 負けた者が行くのか?」

「勝った者でしょ? 負けた者したら、ルウにぶん殴られる」

三人は、ルウへの特攻プロポーズを式の直前と決めた。早過ぎると敵に考える時間を与えてしまつし、遅過ぎると式を強行されてしまう。

「よし、勝負付けるぞ」

「恨みっ」こなしだぞ」

「せーの!!」

——チッケッタ!!——

今度こそ勝負が着いた。

グーが三つにパーが一つ! ……ん???

火傷の痕のあるパーの手は、三人の後ろの高い所から伸びていた。

「やったあ! 私の勝ちです!!」

「大長ー!!」

「文無し!!」

「クイニゲさん!!」

濃い群青色の髪そのヒトは、ジャンケンに勝ったパーをかざして嬉しそうに言った。

「で、何のジャンケンだったんです?」

快晴とは行かず、灰雲の多いどんよりとした空だった。

西風の里の者は皆着飾って、浮き浮きとお祝いムードに浸っている。広場で菓子が配られ、子供達がそれを持って嬉しそうに駆けて行った。

「子供の笑い声が聞こえるな…」

自宅の広間で重い衣装を着込んだルウが、窓の外へ目をやっていた。

「おめでたい日ですからね」

ピンで髪を整える女性が、忙しない口調で言った。

「はい、出来ました」

「母者に見せて来る」

「あまり動くと崩れちゃいます」

「……花嫁の、母だぞ……」

ルウは、高く結った髪を屈んでへぐらせ、モエギの寢室に入った。

「母者、どうだ？」

相変わらず眠ったままのモエギに、ルウは独り言のように囁いた。

「子供達がめでたいて笑っている。それは良いコトなんだろ。」

婚儀の場所は、里の奥の池の前の、白い小さな祭祀場だった。

建物の周りで、子供達が花を投げようと準備している。

女性陣が歓声を上げた。花嫁が姿を現したのだ。介添えの老婆達に囲まれて、ゆっくり、里の道を歩いて来る。祠の中に設えられた祭壇の前には、既にふくよかな花婿が待っていた。

(……???) 誰の婚礼の儀式だった……? ……ああ、私のだ……)

ルウは、子供達が投げた花を、スローモーションのようにぽおっと眺めていた。

遠くの砂丘の上に、三人の少年と、一人の大人の影。

「早くしないと、儀式が始まっちゃうよー!」

「やっぱり、俺が行くよ!!」

少年達はハラハラして地団駄踏んでいた。

「駄目ですよ、プロポーズする権利を勝ち取ったのは私ですからね」

「大長く、本気なんですか?」

「あらら、私も花の独身ですよ。十分資格があると思いますけれど……ふふふのふ……」

大長は不敵な笑みを湛えたえて、そして空を見上げた。

頭上に旋風が起こり、水色の妖精が夏草色の馬で降りて来た。

「子供達をからかうのも大概にしときましよう、大長」

カワセミは少年達を睨みながら長い髪を振って馬から飛び降りた。

「頭に殻の付いた半人前が、プロポーズだ何だと、ピョピョと」

「ナニさ!」

フウヤが食って掛かった。

「一人前の大人が何とか出来ないから、僕達が頑張んなきゃならないんですよ!」

ユウジンとヤンが、あ・あ・このヒトに逆らっちゃダメだ

ああ! ……って感じで、両脇でオロオロしている。

「ほお〜」

水色の妖精のコメカミに青筋が浮かんだ。

「だったら頑張って貰おうか……!」

カワセミは両手を頭上に掲げた。

緑に光る槍がみるみる出来上がって行く。

「う、うそだろ!!」

「そのヒト、相手が子供だとか関係ないから!!」

「動くなよ…、ボクはノーコンなんだ…」

「ひええええ!!」

フウウン!と音をさせて、槍はフウヤのツムジを掠め、ユウ
ジーンとヤンの間を突き抜けて、三人に尻餅を着かせた。

「な、何すんのお!!」

フウヤの叫びは、槍の飛んだ後方で響いた鈍い唸りにかき消
された。

三人がビックリして振り向くと、槍は、いつの間にそこに現
れていた灰色の小さい渦に突き刺さっていた。高速で逆回転す
る槍が、渦を反転させて、消滅させて行く。

「やる事やってー丁前の口を聞け」

カワセミは、槍を投げた腕をブラブラさせながら、白い子供
を見下ろした。岬然としている三人の横を通って、大長はその
彼の傍(かたわ)らに並んで空を見上げた。

「来ましたね……」

次の瞬間、西風の里の上空に爆発するように灰色の波紋が広
がった。

「!!?? な、何? 何なの——?」

「今までのより全然大きい!」

「西風の里全体が呑み込まれちゃう!!」

少年三人は、波紋のあまりの大きさに、口をあぐり開いた。

「さて、行きましようかね」

立ち尽くしている三人を後目に、大長とカワセミはさっさと
馬に跨がった。

「じゃ、お前達、頼んだぞ」

「えっえっえっ……?」

「何を?!」

「大長達が始末してくれるんじゃないんですか?」

「頑張るって言ったろ? それとも「ヨッ」は本当にさえずっ
てるだけか?」

「…!!」

「今見たように、歪みは鎮めてもまた近くに出現します」

大長が、三人の少年に優しく言った。

「私達はそちらを抑え込みに行きます。だから、貴方達、あの
大きい渦巻きをお願いします」

「む、無理ですう…、あんな大きいの」

「ユウジーン、貴方一人じゃ難しいです。でも、一人じゃないでしよっ？」

「…！…」

フウヤが進み出て、水色の妖精を睨み上げた。

「教えないで行く気?! 教えてよ、僕、どうしたらいいか」

「ふん…」

上昇しかけていたカワセミが降りて来た。

「最初(はな)っから素直にそう言えばいいんだ」

大長は、フウヤとカワセミを交互に見て、苦笑した。すっかりカワセミに気に入られてしまったようですね、可哀想に…。

突然上空に現れた灰色の渦巻きに、西風の里は騒然としていた。婚礼の儀式どころじゃない。

「あれは? 前に砂漠で遭遇した、灰色の渦?」

皆が右往左往する中、花嫁衣装のルウは一人、茫然と空を見上げていた。

「けど、何て大きさだ。里全体が包まれてしまっ。まさか、西風の皆をあんな目に遭わせるっていつのか?」

「ルウ!!」

思いも寄らぬ声がして、空から蒼の里の草の馬が降りて来た。

一目で分かる、鮮やかなコバルトブルーの髪の毛トモダチ…! なんだってこんな所に?!

「シ、シユシユか…?!」

「再会の言葉は後で、ルウ! あの渦巻きはヒトの心を喰っちゃまう。西風の里みたいなのが大好物なんだ。心の底に澱を溜めて笑っている、捻(ね)じれたうわへの心が」

ユウジーンという言葉がルウの胸の風穴に突き刺さった。

「誰か! 私の剣を!!」

「ここに!」

ソラがいち早く宿屋に走って、花模様の剣を取って来ていた。

「ソラ…、あれが西風を襲うのは、私のせいだ。私が安易な方向に流れたから…。西風の里を、あんなモノに付け入られる、情けない部落にしてみました」

「貴方のせいでなんかあるものか!」

ソラはルウの肩を支えて、強い声で言った。

「誰もが、目に見えない何かに、踊らされていたんだ…!!」

地上を走るヤンとフウヤの上空から何かが近付いた。

「ヤン? カペラ? どうやってたどり着いた?」

青毛に乗ったシドだ。不穏な渦巻きの全容を見る為、いち早

く偵察に飛び立ったのだ。

「何なんだ？ あの渦巻き。知っているか?!」

「うん！ 質タチの悪いモンだ」

「西風のヒト達に知らせに来たの!」

カワセミに言われた二人の役割…、里の住民がパニックを起こして余計な被害を出さないよう、鎮めに行く事。

「ええ〜？ 地味〜」

「文句をたれるな。ヒトの心を導くのが、実は最も大切で難しい事なんだ」

利かん気の強いフウヤが、カワセミの言葉には素直に頷いた。

ヤンにはちよっと驚きだった。

「よし、待ってろ!」

シドが強力な旋風を起こし、二人の馬は舞い上がった。砂に映る自分の影が遠くなる。

「わああっ!!」

「しっかりと掴まってる!」

シドだって、誰でも飛ばせるって訳ではない。飛べるって信念を持ち続けた者と、その者と共に駆ける愛馬だからだ。

西風の里では、パニックがますます大きくなっていった。

渦巻きが大き過ぎて、どこへどう逃げていいのか分からない

で、住民達は混乱し、子供は怯えて泣き叫んでいた。そこへ、境界を越えて、シドが部外者二人と飛び込んで来た。

「この順番！ どういうつもりじゃ!!」

「みんな、聞いて!!」

物陰から「モ」モ言う老人は無視して、フウヤが叫んだ。

「あの渦巻きに掴まっても、心を強く持っていたら負けないんだ!」

「分からないわ！ 具体的にどうしたらいいのよお?!」

一人の女の子が半泣きで叫んだ。

「け…血統がイイ者は、大丈夫なんでしょ?!」

「そんなの、全然関係ない!! 心の強さだよ! 心の!」

会話の通じなさに焦れるフウヤの横で、ヤンが一生懸命考えながら叫んだ。

「自分の未来を強く想って。何になりたいか、どんな大人になりたいか!」

女の子は胸で手を組んで頷うなずいた。

そうこう言っている間に、歪みがゆっくり渦巻き出して、高度を下げて来た。不気味な唸りが響く。

「うああ!!」

里の大人達は馬を引き出して個々に逃げようとした。子供や

老人は放ったらかしだ。

「狼狽えるな!!」

ルウシエルが粕鹿毛に乗って降りて来た。

「心乱すと助かる者も助からない!」

ソフが、転んで泣いている子供に駆け寄って助け起こした。

「おいで、みんな…、手を繋ぐんだ。隣のヒトを信じて、心を聞くんだって、いつも教えていただろ?」

ソフの教え子達は頷き合って、大好きな先生に駆け寄った。

「自分のなりたい未来を考えるんですって」

さっきの女の子が、両側の子に話し掛けながら輪に加わった。

両側は黒髪の混血の子だったが、気にしなかった。だって自分は、本当はそんな大人になリたかったんだもの…。

大人達も、戸惑いながら固まって手を繋いだ。

「ソフ、シド、皆を頼む」

ルウは迫り来る渦に向けて上昇して行った。

「僕達も行くぞ!」

ヤンとフウヤも乗馬して、広場の真ん中の高い木を、螺旋状に一気に駆け上がった。カワセミに言われたもう一つの役割がある。木のてっぺんを過ぎて、二人は交差しながら空へ駆け

上がりの続けた。

「あらら…、今のは僕、手助けしていないよ」

シドは呆れた声を出し、自分はモエギの側へ行こうと走り掛けた。

「おや」

宿屋の窓から漆黒のハトゥンが顔を出して、親指を立てた。

「いつの間…」

何だかんだ言って、あのヒトもじっとしていらなかったんだろう。

「シド先生!」

年長の教え子達が駆け寄った。

「大丈夫だよ、皆…」

「はい、あの、僕達何か手伝える事ありますか?」

「あ、ああ…。よし、皆、この騒ぎで怪我や火の不始末が起きていないか、見て回ってくれ」

手分けして散る子供達を眺めて、シドは胸を撫で下ろした。

この里は大丈夫だ…!

見事に風をとらえて駆け上がるヤンとフウヤの側に、またぞろ灰色のマボロシが現れたが、今まさに夢を叶えて空駆け回っている二人に対して、何の力も持っていなかった。



上空にはユウジーンが、二刀を両手に待機している。

離れて対峙して、白銀の剣を掲げたルウ。

ルウの横にも蒼白なマボロシがすり寄って来たが、オレンジの瞳は静かに上を見据えていた。

「そう、その、護られていたいのも、確かに私なんだろうな」
マボロシは泣き出しそうな表情をした。

「大丈夫だ、お前…。周りを見ろ、ちゃんと仲間がいる。ちゃんと護って貰える。だからこそ、ヒトを護れる自分になれるんだ。分かるな…」

それぞれのマボロシが希薄になって灰色に溶け、ユウジーンが少し下のヤンとフウヤに向いた。

「ヤン、まだか?!」

「待って!」

フウヤが叫んだ。

「まだ見えないって!」

カワセミは、渦の中に『向こう側』からこちらを助けてくれる者が現れると言っていた。そのヒトとタイミングを合わせるんだと。

「…!!」

ヤンの眼が、渦の中心に二人の人影を見た。白い馬の上で指を組む女の子と、緋色の羽根を広げる少年……!!

「シンリィ?!」

「えっ? シンリィ?」

「シンリィだって?!」

「シンリィ・ファ…!!」

そのシンリィが羽根を目一杯広げ、力を開放するタイミングがヤンには分かった。

——ヒュ——イ!!——

ヤンの指笛と同時に、ユウジーンとルウも、カ一杯破邪を唱えて剣を掲げた。それぞれの光が合わさって大きな光となった。どんな巨大な歪みにも、けてして負けない、強い、光……。

.....

子供達の笑い声に意識が呼び戻され、ユウジーンは目が開いた。涼しい建物の中の、柔らかな寝床に寝かされている。

「そっか、力を使い過ぎて、空中で気絶しちゃったんだ」

横を見ると、床に何重にも敷かれた毛皮の上に、ヤンとカベラも転がっていた。二人もそれぞれ、持てる力を限界まで出し切ったんだ。

「ん……、あ、ユウジーン……」

「むにゃ…おはよ…」

三人は窓から外を見た。陽の傾き具合から、夕刻みたいだ。

西風の里は何事もなかったように平穏だ。自分達にあの渦巻きを退けられたなんて、嘘みたいだ。

「あれ？ 起きたあ？」

通りを駆けていた子供が、窓の三人に気付いた。

「お兄ちゃん達、カッコよかった！ 馬の上で気絶してなかったらもっとカッコよかったのに！」

「それはどうも。ね、ルウシエルは？」

「コンレイのギシキだよ。朝のやり直し。お花しおれちゃったから、また摘みに行ってきたの。早く行かなきゃ、始まっちゃう」

「えっ、ええっ？!!」

ルウは、ぼんやりしていた。さっき、力を使い切ったのだ。

疲れた頭に沢山の事を言われた。こんな事があって……本当は……西風の里の為に……長の血を一刻も早く……。

そうだったっけ？ ああ、確かにそう思ったんだよな……？

今一度、髪が結い上げられ、着付けが直された。老人たちは、この娘がモウロウとしている間に、ドサクサと式を強行してしまおうって腹なのだ。

白い祭祀場の周りに花が投げられている。

さっきもぼつとしていたっけ……。

デジャブな感覚のルウシエルの前に、さっきと違う事が起こった。人混みの中から、スウツと掌てのひらが差し出されたのだ。

次の瞬間、何の思慮も考えもなく、水が流れるように、ただその手を取っていた。もうろうとした中で、その手の暖かさだけがはっきり脳に伝わった。

その手はルウの手を強く握って、駆け出した。

窮屈な金糸の靴を放り脱いで三步走ると、ひつつめて痛かった髪もほどけて、風になびいた。そして、呆気に取られる老人や花婿を置き去りにし、ルウと手の主は、無人に近い里の反対側へ全力で走った。

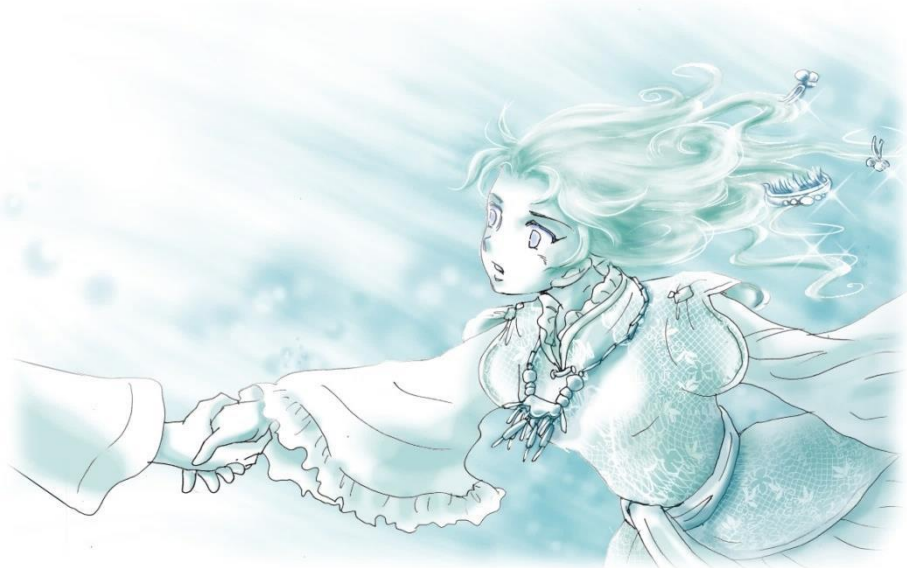
我に返った里の者が追い掛けて来る頃には、略奪者はルウを前に乗せて、馬で飛び去った後だった。

「追え！ 追っのじゃ!!」

老人達は顔色を変えて叫んだが、里の若い者達は、動かす立ち尽くしていた……。

砂漠の真ん中で、馬は降下した。

「飛びのは苦手じゃなかったのか……？ ……ソラ……」
「……分かりません……」



「凄いコトするな…」

「……分かりません。気が付いたら、手が出ていたんです…」
「そうか……」

遠くの砂丘の上に佇む四つの影。

前列に座り込む、フウヤとヤンとユウジーン、そして後ろに背の高い大長。

「ほおらね、心配しなくても大丈夫だったでしょう?」

「…は…あ…」

「ナーガも、何となく予見していたんですよ」

「ソラが、ルウを助けるって?！」

「いいえ、誰が、じゃなくて。あのルウが、誰にも助けられない訳ないって」

「そんな、あやふやな」

「そうでしょうか? 貴方達だって、こうして来ているじゃないですか」

「……………」

少年三人は改めて、遠くの二人を見やった。

「思えば、シドも予測していたのかな。何てだったってソラの一番近くにいるんだもの」

「…ね、ヤン、ルウはどんな顔してる?」

「ん、そんなにニコニコはしていない。でも、メッチャ綺麗」
「ホント？」

ルウシエルは黙っていた。口から先に生まれた娘が、今、一生で一番長く沈黙している。

斜め前に立ったソラが、ポツリと言った。

「僕は……老人達を納得させる事は出来ない」

「……………」

ルウはただ黙っていた。

灰色の肌の西風の一族に置いて、ソラの色素の薄さは、近い親等（しんとう）に、他の種族の血が入っている事を示している。血統に拘（こ）らわぬ老人達は、平気で『雑種』なんて言葉を使（つか）って蔑（あ）む。

「だけれど……………」

「……………」

「貴方があの白い入り口をくぐるのを、何もせずに見ていたら、僕は、残りの人生を、どう生きたらいいのか、分からなくなっていた…」

「……………」

「わっわ」

大長は馬を引き寄せた。

「私は行くつもりですよ。カワセも待っているし」

「あの……」

ヤンが口を開いた。

「あの渦巻きの中にいたの、確かにシンリイだった。ね、シンリイですよー！」

「本当にシンリイだったのか？ 俺、灰色の渦しか見えなかった」

大長は少年達の顔を見ながらゆっくり答えた。

「ええ、シンリイです。あの子はね、『あっちの世界』から我々を助けてくれているんです」

「本当に?! 会えるんですか? シンリイ!!」

「あっちの世界ってどこ？」

「コウジーンが喜色を湛（た）えて叫び、フウヤも思わず大長に詰め寄った。

「うーん、こっちの世界と隣合わせだけれど、『こ』って概念はないですね。安易に踏み入れない所……ってのは、貴方がたも、もう分かっているでしょ？」

「は、は……」

「灰色の渦は、その産物です。あの渦は、こちらから破邪（はしゃ）を使（つか）っても、ふいと引っ込むだけで、まだ近くに現れてしまっ

完全に消し去るには、渦の中側から、逃げられないように押さええている必要があるのです」

「ふええ…」

フウヤが分かったような分からないような声を出した。本当はもっと難解なのを、大長は分かりやすく置き換えて教えてくれているんだろう。

「シンリィには、奥の心と表の心の区別がない。『言葉』もな
いから、惑わずマボロシも出現しようがない。だからあの渦の
中側にいられるんです」

「凄いな、シンリィ。タテにぼおっとしてた訳じゃないんだな」

ユウジーンが変な感心の仕方をした。

「だけどナーガ様…、シンリィの居場所、知っていたんなら教
えてくれてもよかったのに…」

「それは私が頼んだのですよ」

大長はちょっと声を落とした。

「ヒトの心が怖いんです。ナーガも、私も、ね…」

「えっ…?!」

この全てに万能そうなヒトの口からの思わぬ言葉に、一回び
っへりした。

「ヤン、貴方なら分かるでしょうっ？」

「あ……」

ヤンはすぐに思い至った。ヒトの心がちょっとした揺らぎで、
簡単に踏み外してしまうのを。三峰の皆、悪人って訳でもない
普通のヒト達が、集団を組んでシンリィに酷い事をしようとし
た。あの時は、自分もそれが正しいと思い込んでいた。

あれは…そう、確かに、力有る者を万能と思う、一方的な羨
望のせいだった。

「どうするのが正しいのか、私にも分かっています。だから、
今、ここまでしか語らないのを許して下さい」

砂の原に少しの風が吹いて風紋を作った。

皆、黙ってそれを眺めていた。

西風にとって長い一日だった。

朝、長娘の婚礼の儀で浮かれ弾んでいる所に、恐ろし気な渦
巻きが空から襲って来た。

おまけに、やり直しの儀式の最中、今度は花嫁が逃げ出した。

老人達は呆気に取られたが、里の若者達は、ソラがルウシエル
をさらったのを、それ程大それた事に思っていない空気だった。

特にシドは、大して動揺もせず、戻って来た相棒の肩をポン
ポン叩いただけだった。

里の中心の昔の宿屋跡。

ヤン、フウヤ、ユウジーンの三人は、控え室に使った広間に通され、ルウシエルが茶を入れていた。

「あの…これ…」

フウヤが懐から小さな包みを取り出した。

中身は、出発前に入れ墨の男性に頼んで半分分けて貰った参しんだ。

「滋養にいいって。ルウのお母さんに」

「ああ、有難う…」

ルウは茶器を置き、両手を出して小さな木の根を受け取った。

「大長さんが、モエギさんは多分あの歪みの小さい奴と闘ったんだって言った。歪みに負けなかったからこそ、力を使いきっちゃったんだって。だから、きつと目を覚ますって。僕もそう思う。ルウのお母さんだもん！」

「ああ…うん」

一生懸命喋ってくれるフウヤに、ルウは目を細めた。久し振りにマトモな…、心のこもった言葉に巡る会えた気がする。

北の草原のトモダチが、何でここに雁首揃えているのか…、三人は特に言わなかったし、ルウも聞かなかった。

少年達は、久し振りに会った西風の娘の後ろ姿の大人びたうなじを、ほおっと眺めていた。

沈黙を破ったのはフウヤだ。

「あのね、ユウジーン、僕、謝らなきゃならない事があるの。ヤンにも」

「うん？」

「僕の名前、カペラじゃないの。フウヤっていいます」

「…??？ いいけど…何で…?」

「義兄様に、僕のいる場所を知られたくなかったの」

フウヤは正直に経緯(いきさつ)を話した。

「じゃ、じゃあ、僕、蒼の里の長様を『ヒト買い』呼ばわりしちゃったの?！」

ヤンが頓狂な声で叫ぶと同時に、クック…と笑い声がした。

「ナーガのおっさんの衝撃顔が目」に浮かぶな」

ずっと硬い表情だったルウが、久し振りに笑った。それだけで、ヤンもユウジーンも、嘘つかれてたのなんか、どうでもよくなった。

シドとソラが連れ立って入って来た。

二人とも疲れてはいたけれど、穏やかな表情だった。

「お咎めは?」

「特に無しです」

「花婿殿、渦巻きが降りて来た時、イの一番に逃げちゃった時点で、里の皆に、なんだかなあ…って思われていたんだ。老人

達はつやむやの内に勢いで式を強行したかったんだろけど。面目丸潰れで、説教にもいつものキしがなかった」

しかも、歪みが襲って来た時、ぎっくり腰を起こして動けなくなった老人を助けたのは『厩番ふせい』のシドだった。

「ルウ様の縁談も、暫くは棚上げだって。『まだ身を固めるには幼く在られるようで』とさ。連中あくまで、自分達で決めて事にしたんだ」

皆、またちよっと笑った。

フウヤの袖口をヤンが引つ張った。見ると、シドとユウシーンも、既に戸口の向こうに立っている。フウヤも察して、そそくさと外に出た。

後に、ずっと無言のソラと、ルウが残る。

「…さつきな……教えられた…。フウヤと、ヤンに…」

「え…?」

「風に乗ってるんだもん、風の妖精でもないのに。恥ずかしい。私は血が薄いからって、風を流す事なんて出来ないって決めてた」

「……………」

「私…、見習つ。絶対、砂漠の風を流せるようになって見せる。それで、砂の民の血は誇りだって、胸はって大きい声で言う」

「……………」

「だから…そしたら…」

「……………」

「ソラの、人生に、いてやる」

「……………」

「ひ、一人で喋らせるな！ ソラも何か喋れ！」

「……………」

「……………」

母者に頬を寄せられるのも、父者の膝で眠るのも、シンリイと手を繋ぐのも、大好きな暖かさだったけれど……

そついうのとは全然別の暖かさがあるんだな……

ルウはそう思った。

大長とカワセミはまた灰色の渦を追って、旅発って行った。

ヤンとフウヤも連れ立って発った。何であんな事が出来たのか分からないが、二人とももう飛べなかった。でも満足だ。大切なヒトの役に立ちたい、一番肝心な時に翔べたんだから。

「得しようと思っ得たモノは、きつと僕の欲しいモノじゃない。無駄と思える事一杯やって、一杯損して、そこから残ったモノが、実は一番欲しかったモノなんだ」

「僕はお人形じゃない。楽チンな薄っぺらい人生を送るくらい

なら、無理して生まれて来なかったさ」

自分も発とうと思っているユウシンの所に、蒼の里から鷹の手紙が届いた。

《ついでだから、夏の祭祀が終わるまで、西風の事を学んで来なさい。お仕置きは帰って来てからだっぶりあるから、覚悟しておくように》

って内容が、ナーガの生真面目な文章でややこしく書かれていた。

「ナーガ様の粋なはからいだね」

手紙を覗き込んだシドが笑った。

「有り難いけど…」

「あれ、あんまり嬉しくなさぞうだね」

「ううん……」

ルウが…、再会した途端、自分の知らないルウになっていた。弱いルウ、迷うルウ、苦悩するルウ、俯いて頬を染めるルウ…。

ううん、自分が知らなかっただけで、ルウは昔から、きつとそんな女の子だったんだ。自分は自分の心の中のルウを上書きして、また想い続けて行けばいい。

「俺、シドの方がルウを想っている風に見えてた」

「えっ？ そっか？？」

「もしかして…身を引いちゃったの？」

「それはない！ 僕とソラの間には昔っから、遠慮とかそんなのは存在しない！」

「す、すみません…」

「ああ、いや……。本当に、そんな事、…ないんだ……」

夕陽に染まる砂丘のてっぺんが、水飴みたいに揺らいでいた。

緋色の羽根の少年は、揺らぎに身を任せながら、丸窓から西風の里を見つめて、膝を抱えて座り込んでいる。

隣に紫の前髪のリリ。

本当は、もうちょっと後に現れる筈だった渦巻きを、シンリイが手を加えて『あのタイミング』で西風の里に落っこしたのを、側にいるリリは黙って見ていた。

このヒトでも、そういうコト、するんだね……。

リリはただ黙って、少年の柔らかい髪を撫でていた。

それ位しかしてあげられない。

だって仕方がない。女の子は、護りたいヒトの所ではなく、護ってくれるヒトの所へ行くモノだもの……。

～IVへ～